

Trial & Error

No.254

September - October 2006



特集

ひと、つち、むらが変わった!

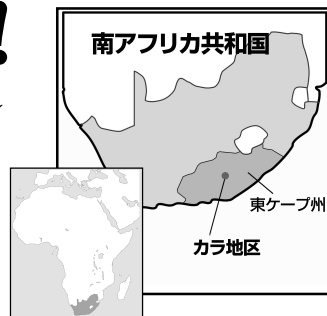
～ 南アフリカでの挑戦 ～

内戦と難民のスーダンで JVC の活動が始まる

ジャワ島中部地震被災地支援
ODA で武器を送り始めた日本

ひと、つち、むらが変わった！

～ 南アフリカでの挑戦 ～



JVCが南アフリカで5年間進めてきた環境保全型農業のプロジェクトが7月で終了し、新しい段階を迎えた。このプロジェクトが人々の暮らしや意識、地域にどのような意味を持っていたか。そこから何が生まれ、未来にどのような可能性をはぐくんだか。以下、JVC南アフリカからの報告である。(編集部)

尊厳を取り戻す人々に 囲まれて

南アフリカ事務所 農村開発担当 小林 恭恵



■アパルトヘイトは 土も壊した

環境に配慮し、持っている資源を活用する(お金のかからない)農業を作ることを目指し、JVCは二〇〇一年に南アフリカ共和国東ケープ州カラ地区で新しいプロジェクトを立ち上げた。ねらいは、村の人が食べ物を自給し、自足した暮らしをすること。私たちはこれを環境保全型農業と呼んだ。

自給用食料の生産を増やすことに関心を持ってプロジェクトに参加した村人たちは、活動を始めていくうちに、なぜ環境保全型農業を実践することが重要なのかを強く意識するようになった。カラ地区の環境は農業をするのには厳しい。標高が千三百メートル以上、強風が吹き、降水量は六百ミリ前後と少ない。冬は霜がおりるほど冷え込む。家畜が作物を食い荒らす。しかしそれも重要な財産なのだ。村人の何人かが、「風が強いので」「乾季だから」「水がない」「肥料がない」と語るのを、私は聞いたことがある。それに行政

の農業政策も小規模農家にやさしいものではない。

人種隔離(アパルトヘイト)政策によって、人口の八割を占めるアフリカ系住民は、自分たちが伝統的に所有していた肥沃な土地を奪われ、国土の二三%に満たない荒廃した土地(「ホームランド」)に追いやられた。カラ地区もそのホームランドの一つ、「トランスカイ」に含まれていた地域である。当然の結果として、こうした地域では家畜は過放牧となり、土壌の荒廃・流出が大きな問題となった。私がもし村人でも、ここで農業をがんばることは難しいだろうし、がんばろうとはとても思えないに違いない。

■次世代のために

だが、カラの村人たちはがんばった。環境保全型農業という村人にとっては新しい試みについて、家族の理解と協力を求め、モモやリンゴの苗を植え、水分の蒸発を防ぐために草で土をカバーし、溜め池を掘って雨水を貯め、牛糞を畑に運んで肥料として利用し、ハーブをつけた水を害虫除けとして撒き、多様な

種類の野菜や薬草を植え、自家採種も始めた。一人ひとりの村人がそれぞれ異なる困難に立ち向かった。村人たちががんばるのには理由がある。一つは、環境保全型農業によって、年間を通じて食料の多くを自給できるようになったことである。手元にお金がなくても、食べ物家族全員のお腹と心を満たしてくれるようになったことは大きな励みとなった。もう一つは、家族が満たされるようになり、農民として、あるいは親としての自分に自信が持てるようになったことである。

私がかつとも心を動かされたことは、環境保全型農業を実践するカラの村人たちが皆、「人間としての尊厳を得た」と口をそろえて言うことである。日本で生まれ育った私には分からないような、村人たちがとても大切に感じる威厳が、環境保全型農業の実践の中から生まれている。

例えば、環境保全型農業の研修を受けた村人が研修修了証書を受け取ったとき、他の村人から煙を貰ったとき、家族と一緒に働いた畑からとれたジャガイモを食べるとき、野菜を売って得たお金で家畜や家具を買ったとき。そんなとき「以前の自分とは違う自分になった」と村人は笑顔で言う。村の人はそこに大きな喜びと自分の存在意義を見出していることが、私にも伝わってくる。

この五年の間に、カラの村人たちは、環境保全型農業の実践を通して、確実に生活のプラスの変化を実感するようになった。食料生産のコストが下がるので家計の大きな助けになり、また質のよい野菜や穀物が収穫できるので健康増進にもつながる。しかも、自然の仕組みを利用した栽培は、生活環境の改善にも貢献する。生活に必要な資源の多くを身近な自然環境に依存している村人にとって、現在南アフリカで広く普及している「環境破壊型農業」^{※①}を続けていくことは、ツケを次世代に回すことにつながる。こうしたことに気付いた村人たちは言う。「環境保全型農業をやめるなんてとんでもない。だって、土さえあればいいんだから」と。

■さらに大きな洞を

このプロジェクトは、七月に当初計画していた五年間の活動を終了する。「ない、できない」から「ある、できる」への転換をした村人たちが、さらなる発展への一歩を踏み出したこと、そしてそれを目指してきたことは、本当にすばらしかったと感じている。

環境保全型農業の普及で、カラでは百世帯の農民とその家族の生活が改善され、近隣の人も新鮮な野菜を買うことができるなどの恩

注① 研修修了証書、表彰：ともに村人の誇りに深く根ざしている。村人はこれを名誉と捉え、大きな喜びをもって受賞する。差別を余儀なくされてきたアフリカ系白人、特に農村という周辺に位置する村人にとって、自分の存在意義と尊厳に関わることは、私たちが想像する以上に大きなモチベーションとなる。

活動内容

農業技術研修

より自然の仕組みに近く、環境にやさしい農業を。

- ・多種多様な作物を植える
- ・堆肥づくり、マルチングなど
- ・等高線農業、溜め池づくりなど



畑で実践!

フォローアップ

- ・アドバイスや相談にのる
- ・畑のモニタリング
研修の実践度を測る
- ・環境教育
- ・優秀者を表彰!



農民ミーティング

- ・情報共有、学びあい

食料の自給、
生活環境改善へ。

フィードバックして
実践をより深める

人種差別（アパルトヘイト）政策下で、南アフリカ共和国のアフリカ系住人たちは尊厳を傷つけられてきた。彼らが自分たちの自信や誇りを取り戻せるように、JVCは、まず外部の状況に依存しなくてすむように食料の自給を目指して、より自然の仕組みに近く、従来の土地や資源を活用する形での環境保全型農業を、東ケープ州カラ地区の9ヵ村において2001年より開始した。

各村それぞれ約15名が環境保全型農業の研修に参加し、村人たちによる実践が始まった。以降、毎月2週間、農業専門家が現地に入り、フォローアップのための活動を展開してきた。畑の巡回では、村人も同行して、それぞれの畑での実践をチェックする。結果、長期にわたって実践度合いが優秀な村人は「優良農民」として表彰され、篤農家とされる。

農民ミーティングには、毎月1回開催される代表者ミーティングと、隔月1回開催される篤農家ミーティングがある。篤農家ミーティングは、それぞれの篤農家の自宅を持ち回りで会場とし、畑の見学をはじめ、環境保全型農業の経験の共有、村を超えた農民同士の交流が図られる場として、毎回活気に満ちている。

研修のフォローアップ、農民ミーティング、必要な資材の支援などを通じて、プロジェクトは村人の歩みを応援してきた。今後も、JVCは村人たちの環境保全型農業への取り組みに貢献し、共に発展することを目指している。

恵が得られた。この事例から明言できることがある。南アフリカという国で、農村部の人たちが持てる資源を利用しながら自発的に生活改善を行なっていくために、環境保全型農業は大変有効である、ということだ。カラでの経験と、「ある、できる」への発想の転換は、南アフリカの他の地域でも有効であると、私は確信している。

しかし、南アフリカの農業省の政策が環境保全型農業と重なり合う部分が少ないことが気がかりである。新しい試みである環境保全型農業を村々に説いて回ることには限界がある。

そこで、この環境保全型農業が同時多発的に普及され、これによってより多くの村人が発展していくために、行政との協力は欠かせないことができないものになってくる。

環境保全型農業の村レベルでの普及に関心を示す地方行政は現れ始めている。JVCとしては、カラの村人たちの声をもっと遠くに伝える必要があるので、私は考えている。彼らの喜びと痛みを伴った生の声は、聞く者を真摯にするからである。行政とのネットワークや政策提言など、村人たちが自発的に実践するには難しいことこそをJVCが担い、村人たちに貢献していく必要がある。

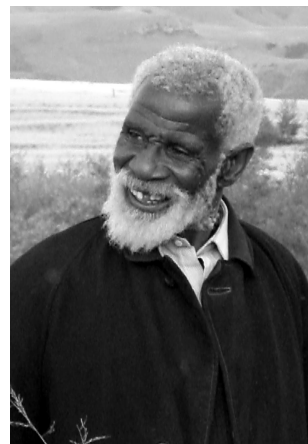
■私の思い

八月以降、プロジェクトはフォローアップ期間に入る。毎月カラを訪問していた農業専門家のチームさんとJVCは、三ヵ月毎に村を訪問してアドバイスを続け、村人の歩みを励まし支えるだろう。

八月にカラを去る私には、見届けられないものがある。それは、カラ地区で「点」となった村人たちが、プロジェクトの後に「線」になるかどうかである。すでに、同じ村の中で環境保全型農業を実践する村人たちは集い始め、また、隣り合った村同士でも自発的な交流が始まりつつあるのを感じる。

これからも村人たちの歩みは続いていく。私はカラを去るが、彼らがカラを去ることはない。彼らの毎日、一歩一歩がより良き生活を目指す終わりのない道であり、私は、村人たちがこの歩みを楽しんでいて、このことを感じる。カラ地区で環境保全型農業を実践する百世帯は、五年後には三百世帯になっているかもしれない。何らかの理由で環境保全型農業の実践をやめた村人も、この三百世帯の中に含まれているかもしれない。次世代を担う子どもたちが含まれているかもしれない。カラ地区の村人たちの発展の歩みが幸多きものになるように、どこにいても、私は祈ることだろう。

注② 環境破壊型農業：ここでは、環境保全型農業の対極に位置するものとして、化学肥料や農薬に依存し、生態系や農業に従事する人自身に健康上の被害を与えうる農業のことを指す。経済成長を重視する現在の南アフリカの農業政策は、多くの多国籍企業の影響を受けてこうした農業を推奨している。



ムテテレリ・ヨレロ (Mthehteleli Yolelo)

カラリザープ村在住。村で環境保全型農業を実践する人から影響を受け、02年に実践を始めた。多様な穀物(トウモロコシ、ソルガム、小麦など)、野菜、果樹を育てることに成功している。

お金は持っていないませんが、畑にお金があるようなものです。

私たちはJVCから新しいことをたくさん習いました。たとえば、化学肥料を使うと土が固くなってしまつことを学び、今は牛糞を使ったコンポストの肥料を使っています。土が肥沃になり、よく収穫できるようになりました。また、土が雨の降らない冬でも固くならずにやわらかいので、年中何かを植えることができます。自分の畑から常に食べ物が採れるのです。以前から農業はしていましたが、子どもが十人もいるので、お店から食料を買う必要がありました。今では十分な量がとれ、子どもたちがお腹をすかせることもありません。

環境保全型農業は、私たちの祖先が実践していた方法と似ています。親や祖父母の世代がいろいろ

と教えてくれたのに、私たちの世代の人間は農業をやめ、お金に頼るようになってしまいました。現金収入を得るために出稼ぎに行くようになったのです。しかし、JVCが来て、もう一度私たちに環境保全型農業を教えてくれました。今私はお金に頼ることなく、生活費を稼ぐために遠くへ行く必要もありません。今は畑にお金があるようなものです。環境保全型農業をこのまま続けていけば、将来も生活上の問題を抱えることはないように思えます。

現在、畑からは私の家族の分だけでなく、他の人たちに分ける分も収穫できます。もっとたくさんの人が環境保全型農業を実践するようになるといいと思います。

村人たちの声 ～実践こそが自信を生む～

聞き手：南アフリカ事業担当 渡辺 直子



■土しかなかったシルワナさんの畑(上)も、2年間で見違えるようになった(右)。



もともと農業には興味があつて、畑で野菜を作っていました。が、うまく育ちませんでした。でも、〇四年にJVCの研修に参加して以来、JVCや友人たちが言ったことを実践してみると、畑が見違えるようになりました。環境保全型農業を始めて、自分でもできるようになりました。以前の自分とは違う人間になったようで嬉しいです。知識を得て成長することは、私にとってとても大きなことです。

雨水用の溜め池は、自分と息子で穴を掘り、JVCに支援してもらった金網とセメントで固めました。こういう作業は初めてです。自分にできると思いませんでした。でも、JVCの言うことを注意深く聞いて、先に溜め池を設

置した近所の友人のアドバイスを受けながらやったら、立派なものができました。自分に能力があることを知り、大きな自信につながりました。何でも挑戦してみようと思い、ドラム缶の中でミミズを増やして、それを畑に入れて土を肥やすことにも成功しました。これまで続けてこられたのは、一緒に実践してきた友人たちが励ましてくれたお陰です。

私には九人の子どもがいますが、今は三人の子どもと孫と暮らしています。夫は亡くなりました。現在の主な収入は私の障害者を年金だけです。私には子どもたちを育てていく責任があります。環境保全型農業は自給のために必要です。自分の励みにもなるのでずっと続けていきます。

自分でなんでもできるようになり、以前の自分とは違う人間になったようです。



ノウェトゥ・シルワナ

(Nowethu Silwana)

レベルスクーフ村在住。他の村の実践を見て環境保全型農業に興味を持ち、同じ村の女性たちとともに04年にJVCによる研修を受ける。

■可能性への挑戦

南アフリカで環境保全型農業プロジェクトを開始するにあたって、不安と期待があった。JVCはインドシナ諸国やエチオピアで農業プロジェクトを実施してきた経験があったが、南アはいくつかの点で「特殊」だったからだ。

村で農業をしている人は少なく、自給率は一〇%を下回る。これは、アパルトヘイト政策下で白人大規模農場を拡大するために、意図的に土地の収奪や労働力の鉱山などへの吸収が行なわれた結果で、村人たちは、食料の多くを町の白人経営の店で購入するようになった。

さらに、活動地となった東ケープ州カラ地区は山間部で気候が厳しく、乾季となる冬は何も育たず、あたり一面が茶色一色になるような地域であった。でも、アパルトヘイト下で失われた人々の尊厳、自信や誇りを取り戻すためには、彼らが生きる「土地」を利用し、そこに生きる価値を見出していくことにすると考えた。プロジェクトを振り返り、重要だと思ふ点を三点に絞って紹介したい。

①ヴィジョンの共有

プロジェクト開始時に、五年後、十年後にどんな村にしたいのかということ話し合い、共有した。「冬でも緑があるような村に」「子どもたちが健康に育つような野菜を作りたい」といったヴィジョンが出され、それを実現するために何をしていけばよいか一緒に考えた。

②「ない」から「ある」へ
村人は当初「これもない、あれもない」から農業ができないという気持ちが強かった。際限なく続く「ないもの」をJVCが提供することは不可能だし、それで解決になるわけではない。発想を転換し、「あるもの」「可能性」に目を向けるようにした。

また、「問題」という言葉を使わず、「チャレンジ（挑戦）」と考えるようにした。たとえば「水がないことが問題」ではなく、「天の恵みである雨水を少しでも有効に利用するためにどうすればいいか」と考えた。そして、農業専門家による研修の中で、「等高線上に溝を掘る」「溜め池を作る」など自分たちでできることを学んだ。

③参加型モニタリング

研修で学んだことを実践で深めていけるよう、村人と一緒に畑を観察し、モニタリングを行なった。このモニタリングの過程は、村人が学びあう機会になり、結果を記録していくことにより進展や課題を明確にすることができた。

みんなで広げる段階へ来た

南アフリカ現地代表 津山 直子



プロジェクト開始時からこの活動に関わってきた津山。活動開始前の不安や活動を通しての村人たちの意識の変化、そして今後について話を聞いた（編集部）。



活動が進む中で、新たな展開が次々と生まれた。それは、最初に村人が描いたヴィジョンに一步步近づいていく過程でもあった。

■これからの関わり方

活動はプロジェクト開始時に計画していた五年間が終了し、新しい段階に入る。今年一月から半年に渡り、村人とともに、「これまでの成果と今も残るチャレンジ」「環境保全型農業の実践によって変わったこと」「今後していきたいこと」「自分たちができること、JVCができること」などについて話し合いを続けてきた。

その結果、「篤農家を中心に自分たちでこの農業を自分の村や近隣の村で広げていく」ことを今後の活動の基本に位置つけた。その上で、次のような点がJVCの役割として話し合われた。

①フォローアップとアドバイス
農業専門家、JVC調整員が村を四半期ごとに訪問し、相談を受けたり、アドバイスを行なう。

②「トレーナー」のための

トレーニング
篤農家たちがトレーナーとして、より体系的にわかりやすく教えることができるようにするためのトレーニングを実施する。

③篤農家ミーティングの継続

篤農家同士の学びあいと、活動の成果や計画を共有する場として、JVCも参加して、篤農家ミーティングを継続する。同時に篤農家は村ごとのミーティングや学びあいの機会を作り、より多くの篤農家が育つようにする。

④遺伝子組み替え種などについて

南アでは近年主食のトウモロコシを中心に、企業や政府により急速に遺伝子組み替え種の導入が進んでいる。篤農家が「遺伝子組み替え種」の危険性を村人たちに知らせていく活動に協力していく。

⑤政府に対する政策提言

南ア政府は、「食糧増産プログラム」として、農業や化学肥料を大量に使う農業の導入を進めており、土壌の疲弊や支出増、健康被害などの悪影響が出ている。JVCが村々で行なった収量調査では「食糧増産プログラム」はお金をかけているのに、収穫量は環境保全型農業より低い、という結果が出ている。これらのデータやこれまでの活動記録を有効に使い、政府への政策提言を行なっていく。

⑥カラ地区での実践を広く紹介

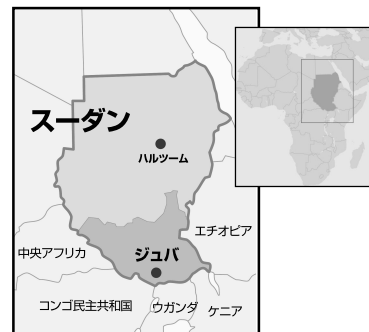
活動をより広く紹介していくために、資料を作ったり、農民の声を直接伝える機会を作る。メディアへの働きかけもしていく。



SCC スタッフたちと。



SCCのスタッフたちと一緒に修理作業を行なう井谷（右から3人目）



内戦と難民のスーダンで

JVCの活動が始まる

車両整備専門家 浜口 龍太



■南スーダン、ジュバに入る

六月一日に車両整備専門家の井谷正吾君とジュバに入り、現地協力団体であるスーダン教会評議会（SCC）のゲストハウスで暮らし始めた。翌日からSCCの車両整備工場に朝八時半に顔を出し、夕方帰途につき、その夜の食事の材料を買って、食事の準備をし、暗くなる頃に食事を終了。携帯型電燈の明かりで本を読んだり、日記を書いたりしてベッドに入る。

暑い。電気なし、水道なし、食べられるものも少ないという状況で、夜は私の持ち込んだコールドのガソリンコンロを使ってご飯を炊き、野菜やツナ缶を使ったスープを作り自炊している。

ジュバに入った当初、個人用の蚊帳をつつて寝ていたのだが、いつの間にか蚊に中に入り込まれ

何か所か刺された。これが原因で六月十二日の朝にマラリアを発症し、民間の診療所に行き三日分の薬をもらってひたすら養生した。その後、三日間では回復しマラリアから脱出した。

一般の日本人はスーダンがどこにあるかも知らない人が大部分だろう。私もスーダンについてはあまり知らなかった。何しろ新聞記事にダルフルのことが出始めたのは二〇〇五年の始め頃から。だが、ここへきて少し風向きが変わってきた。原油価格の高騰とスーダンが産油国になり、アフリカでもナイジェリア並みの埋蔵量があると分かり、石油資源獲得の対象として注目され始めた。それと同時にダルフルにおける政府軍・民兵の地元住民に対する襲撃事件や国内避難民の大量発生が報道が、「何とかしなければ」という

人々の関心を高めている。内戦、エイズ、干ばつ、飢餓、人権侵害、少年兵、児童労働など、スーダンに限らず、アフリカには問題は数え切れないほどある。この時期にJVCがアフリカに関わることは本当に意義のあることだと思う。

■研修生はみな難民だった

JVCはジュバで、難民の帰還及び地域への定住のために活動するUNCHCR、そして地元の団体であるSCCと共に活動を進める。UNCHCRの車両整備を通して難民帰還に貢献するだけでなく、内戦によって死に体だったSCCの整備工場を機能回復させ、自力で稼働できる状態に持って行くきっかけを作る。そして同時に帰還難民の社会的・経済的自立のための訓練を、車両整備の仕事を通して実施していく。これはJVC

Cにとって南スーダンに関わる入り口のプロジェクトになるのではないかと思う。

この整備工場で現在研修を受けている四人はみな難民だった。板金塗装の責任者のサムエルの母親は、つい一週間ほど前に二十年ぶりに隣国ウガンダから帰ってきた。また、この工場の創業時に働いていたというメカニックが訪れてきて、「一カ月前にハルツームから帰ってきたところだ」と言っていた。南スーダン政府の要人の中にもケニア、ウガンダ、中央アフリカなどからだけでなく、アメリカ、カナダ、ヨーロッパ諸国から帰国した人もいると聞いた。それだけこの地出身の人々が、平和を維持し続け、社会の復興に役立ちたいと思っているのだと感じる。

JVC スーダンが動き出した。国連難民高等弁務官事務所（UNCHCR）と組んでの難民帰還のための車両整備事業を地元団体と共同で始める。現地からの第一声をお届けする。（編集部）



■整備工場の敷地内に長年放置されていたスクラップや鉄くずを整理。炎天下の作業で、草の下刈りもした。とにかく、作業をできる環境作りから始めるしかない状況。



SCC のメカニクと研修生たち

聞き手：スーダン事業担当 岩間 邦夫

サイモン・シキ・ザカヨ

(工場長、五十五歳)

SCC の車両整備工場で八二年から二年間研修を受けた後、メカニクとして同工場で勤務。勤続二十年以上のベテランである。現在は工場長。子供は十七歳を筆頭に四人。出身はジュバから約百七十キロ離れたケジゲジ村。内戦中からずっとジュバに住んでいる。当時のジュバはアラブ政権の支配地域で、アフリカ系住民は様々な面で苦難を強いられた。工場で盗難があった際も捜査当局から疑われ、二日間拘留された。

職人気質で、バイク屋が模造品のエンジンを販売しているのを見つけると叱り飛ばす。

「今は経験のあるメカニクが限られているので、自分も自分メカニクとして働く必要があるが、将来的には若いメカニクを育成する活動にも興味がある」



サイモン氏 (右)

ビタレ・オケッチ・オモン

(溶接工兼プロジェクト・アシスタント、四十歳)

南スーダンの主要都市ワウの職業訓練校で自動車整備を学び、八十四年より溶接工として勤務。内戦中からずっとジュバにいる生え抜きの職員で、とにかく顔が広い。フットワークも軽いので、資材調達や関係省庁とのやり取りなど、プロジェクト・アシスタントとしても欠かせない存在。

家族は両親・妻・子供含め皆カトリックだが、彼一人だけプロテスタントだそうである。子供は四人。他界した二人の兄の子供三人も引き取って養っている。貧しいので昼食をよく抜くそうであるが、体型は太っている。

「内戦中は食べ物も不足しているのがつらかった。将来は資金を貯めてビジネスを始めたが、これまでもそうだったようにここでは先のことは分からない。神のみぞ知る、だ」



ビタレ氏 (右)

ジョセフ・シンダニ・ワニ

(研修生、二十二歳)

○五年八月から研修生として勤務。自動車メカニクに興味があり技術を習得できる所を探していた。出身はジュバから約百五十キロ離れたウンドウルバ村。ウガンダの難民キャンプで三年間避難生活を送った。家族とはバラバラになり、○二年に平和が戻ると聞いて故郷の村に戻り、その後父親を頼ってジュバに出てきた。母親はすでに他界、兄弟も各地に散らばっている。

「この工場で技術を学んだ後は、ジュバでメカニクとして働きたい。将来は自分の修理屋を開きたい」

サムエル・ケミス・マルテン

(研修生、十九歳)

○五年十月から研修生として勤務。ウガンダの難民キャンプに両親と一年半滞在。治安の悪化で出身のカティギリ村(ジュバから約百三十キロ)を離れたが、平和が実現すると聞いて○三年に戻った。ウガンダでの学校の授業料が高くて払えなくなったこともある。

「研修が終わったらジュバで働きたい。いつか自分で修理屋ができるようになりたい」



研修生の4人。
サムエル君(左端)、ジョセフ君(右端)

現地報告 ジャワ島中部地震被災地支援

緊急支援担当 下田 寛典

2006年5月28日早朝5時54分、インドネシア・ジャワ島中部ジョグジャカルタ付近にてマグニチュード6.3の地震が起きた。5,700名を超える犠牲者、37,000名にのぼるけが人に加え、20万棟を超える家屋が損壊した。現地に入ったスタッフが報告する。(編集部)



■破壊された日常

地震発生から二日後、JVCは今回の地震を受け緊急支援の検討を始めた。インドネシアはJVCが従来活動している地域ではなかったため、これまでのタイのスマトラ島沖地震に伴う津波被災地やパキスタン地震での支援活動と同様に、現地で活動するパートナーを探し始めた。その結果、JVCと同じ台東区に事務所を構えるAPEXというNGOと協力することになった。APEXはこれまでジョグジャカルタを中心に、排水処理やバイオマスなど環境保全の分野で活動を行ってきた団体だ。JVCは、今回APEXと協力し、同様の専門性を持つインドネシア現地NGOのディアン・デサ財団の活動を側面支援することにした。

六月十三日、被害の様子をこの目で見て支援の今後を展望するために現地を訪れた。ジョグジャカルタ市内から国道沿いに車を走らせた。ほどなくして車は被害が最も大きかったとされるバントゥル県に入った。国道をそれて少し細い道に入ると様相は変わっていった。道沿いの家々は完全に崩れているものもあれば、いままさに崩れようとする家をつっかえ棒で必死に支えている家まで様々だった。正午過ぎ、セボン郡のティンブルハルジョ村に到着した。車を降りてまず目に飛び込んできたのは、倒壊した家の瓦礫が一面に広がる光景だった。その上には、乾季の空に太陽がいつもと変わらぬ様子で浮かんでいた。残った家の柱と柱の間に洗濯ロープが張っており、その場に不釣り合いなくらいに色とりどりのTシャツが風に泳いでいた。

■復興への自信を取り戻す

瓦礫の中に足を踏み入れてみると、水浴び場兼トイレがあったであろう場所に出くわした。便器は大小の石で埋まっていた。水も出ない始末。生活水の源である井戸も多くが泥や砂が混じったか、もしくは枯れてしまっていた。使えない状態だった。パキスタン地震のときもそうだったが、被災地を訪れると圧倒的な被害を目の前に言葉になくしてしまう。一つ違ふことは、ここでは人々の声がそこかしこから聞こえてきたことだ。冬を目前に寒さに震えるパキスタンの子どもたちの姿は余計にその被害の深さを訴えていたが、この村で子どもたちの元気な遊び声が聞こえたときには、正直少し安心した。大人たちもお互いに声を掛け合いながら瓦礫を

一つ一つ手作業で撤去していた。ディアン・デサ財団はこの村も含め、六月六日までにジョグジャカルタ特別州などで計八十二村、約三万世帯に対して食料・テント・医薬品などの緊急支援を行なった。JVCの第一回目の支援は緊急の物資購入費用として使われた。今後は、ディアン・デサ財団やAPEXの専門性を活かし、井戸の修復やトイレ・水浴び場・洗濯場と一緒に作った仮設の建屋を設置していく。衛生施設の設置作業は村人自ら担ってもらおう。こうした作業を通じて、「水」を中心とした生活環境を整備していくのと同じに、復興にかける村人の自信を取り戻すことも一つのねらいだ。JVCでは、今回の支援活動を八月末をもって収束させる予定だ。三カ月あまりの短い期間の支援ではあるが、JVCは現地に密着した活動を続けていく。



■トイレ兼水浴び場兼洗濯場の建屋は村人自身によって作られる。

ODA で武器を送り始めた日本

調査研究・政策提言担当 高橋 清貴

国会閉会直前の六月十三日の朝、日本政府はインドネシア政府にマラッカ海峡に出没する「海賊対策」を名目として巡視船艇三隻を政府開発援助（ODA）によって供与することを閣議決定した。この決定に対し、私たち NGO は、JVC 他十一団体が呼びかけとなって、六十九団体及び三百三十八名個人の賛同の下、この決定を見直すように日本政府に申し入れを行なった。

理由は、海賊対策という名目でも、「武器輸出禁止」というこれまで日本が平和国家として持っていた価値をないがしろにする傾向に拍車をかけるのではないか、それを ODA の資金で行なうことは ODA 大綱に規定された「軍事的用途への使用を回避する」という原則に抵触する上、限られた ODA 予算を武器供与に充てることで、本来の援助目的である貧困削減への取り組みが低下してしまうのではないかと懸念したからである。

「武器輸出三原則」に例外を設けることは、二〇〇四年、米国のミサイル防衛に関する技術協力を行なうことに決定した時に、新防衛大綱の発表に合わせて官房長談話として発表された。その際、「テロ・海賊対策への支援」も「武器輸出三原則」の例外扱いとする旨を示唆している。従っ

て、今回のことはその決定を踏まえた上でのことである。また、輸出される巡視船艇も防弾対策が施されているが、殺傷能力を持つ機銃等は装備されておらず、供与先も軍ではなくインドネシアの海上警察局である、というのが政府の説明である。

しかし、送られた巡視船艇が実際にどのように使用されるかと考えれば、インドネシア政府によって機銃が装備され、イン



ドネシア海軍との共同作戦で使用されると考えるのが常識であろう。すなわち、準軍事的用途のために使用される蓋然性が極めて高いということである。その「武器」を ODA で輸出するということなのである。

ODA 大綱の原則に照らせば、そうした使用は望ましくなく、軍事的用途への使用を回避するためには、高いモニタリング体制の整備が伴わなければならない

い。さらに、当局の暴走を防ぐためにも、インドネシア市民の監視能力といったガバナンス全体の強化が求められるはずである。

これに対して、日本政府は大使館と JICA とで慎重にモニタリングすると答弁しているが、果たして JICA にインドネシア当局による海賊対策作戦行動をモニタリングするキャパシティがあるのだろうか。包括的かつ現実的に「対テロ対策への支援」を考えるならば、慎重な対応が求められるはずである。しかし今回は、これまでの武器輸出の例外化の場合と違い、国会審議もないまま、閣議決定だけで決定された。

マラッカ海峡は、太平洋とインド洋を結ぶ主要航路の一つとなっている。中東から日本に来るタンカーがここを通るために、日本の輸入原油の八〇％はここを通過している。また、この海峡は世界で最も頻繁に海賊が出没する地域でもある。特にインドネシア沿岸が危険で、現在の海賊はマシガンやロケットランチャーなど近代兵器さえ備えている。

日本政府は、こうした事情に鑑み、供与の決定を下したのである。〇三年に新しく書き換えられた新 ODA 大綱も、ODA の目的として「我が国の安全と繁栄」のために使うこととし、重点課題にも「テロ対策」が盛り込まれてお

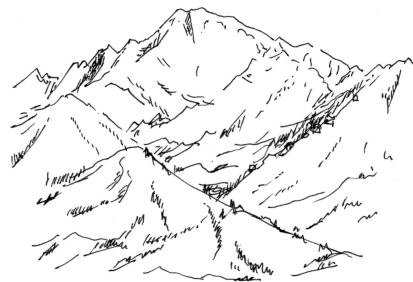
り、今回の巡視船艇供与はその格好の前例となった。しかし、ODA を「国益への寄与」や「テロ対策」であれば「武器供与」に使用してもかまわないとするかどうか。さらに、マラッカ海峡の治安強化は、グアムを新たな拠点とする米軍の再編とつながる問題でもある。また、「紛争予防」としての武器供与、「紛争後復興」での自衛隊との一体化した ODA の運用、と問題は拡がる。

日本の国益に寄与するのであれば、どのような手段であれ、どのような意思決定であれ、良いとするかどうか？ 今回の事例は、私たち市民に対して、ODA と「安全保障」の関係をどう考えるべきかをつきつけている。ならば、もっと市民に開かれた場所できっと議論し、決定すべきではなかったか。今後も、この立ち位置から一市民として政府に意見を述べていきたい。

スタッフのひとりごと

戦国パキスタン

パキスタン地震被災地支援現地調整員 藤井 卓郎



イラスト／かじの 倫子

ハージー・アター氏は最近まで JVC のパキスタン地震支援事業の 4 輪駆動車の運転手だった。退職した彼はアフガニスタンとの国境の町に帰ったのだが、今になって人づてに彼の訃報に接した。土地をめぐる争いで凶弾に倒れたのだ。この国ではよくある話なのである。

パキスタンでは「ドゥシュマーニー（敵対関係）」を抱える人が多い。私たちの活動地バタグラムは山岳地であるが、村は常に尾根筋に形成されている。なぜかと聞くと、谷筋に家を構えたと尾根から狙い撃ちされる

恐れがあるから、と言うのである。

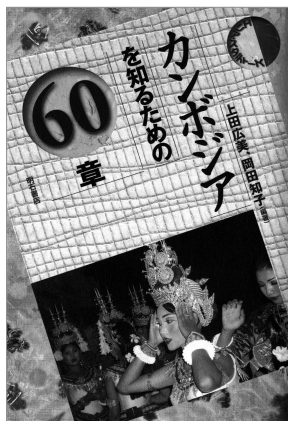
私たちが地震被災者支援のために進めているトイレ支援にも、このドゥシュマーニーが影を落としている。トイレは各夫婦単位で設置できるわけではなく、20 人前後のグループングを行なって各グループごとに設置しているが、お隣のテントに住んでいる兄弟の家と同じグループになりたくない、などということがあるのである。「兄貴とはちょっとドゥシュマーニーがあつてね」。最近導入した鋼板製トイレ建屋、JVC としては長持ちさせるため防水テント地を

鋼板に切り替えたのだが、別の理由でも好評である。「今まではトイレがなく、野外排泄でしゃがんでいるとき殺られやしないかと心配だった」「これなら丈夫なので排泄時に敵に襲われる心配がない」。戦国時代(?)のバタグラムを、JVC トイレは民衆とともに生き抜いている。

●JVC では危機管理、安全管理について、住民との話し合いを通じた信頼醸成と他団体との綿密な連絡調整を通じて、現地の治安状況を逐次見極め、活動を実施しています。

『カンボジアを知るための 60 章』

みるよむきく



上田広美、岡田知子 編著 明石書店 2,000 円 + 税

モン・スーン・アジア圏に位置する自然の懐の深さに寄り添いつつ人々は季節を送り、稲作文化、仏教信仰や様々な儀式から豊かな暮らしと価値観が紡ぎだされ、一般的なカンボジアのイメージの背景に息づいているのを知る。そして、民話や物語から生まれる格言やことわざ、行ない・布などモノの意味を知ることによって、人々

「エリア・スタディーズ」シリーズとして、本書は「初めてカンボジアに関心を持った方々のための入門書」としてまとめられた。編著者を始めすべて女性の執筆者が、「ことばを編む」「暮らしを知る」「歴史をたどる」「社会を考える」「芸術を楽しむ」「明日へつなぐ」の全編にわたって、「遺跡」「ポル・ポト裁判」「地雷」「子どもたち」などメディアを通じて見聞きする以上の、現代カンボジアを描き出している。

こつした様々な「根っこ」が、内戦の傷跡残る社会、経済発展が進む中での格差拡大や性産業の復活と人身売買問題、援助がかたよる教育・保健・社会福祉サービスなどの社会問題にも影を落とす。本書を読んで関心を持ったなら、巻末の参考文献がさらなるカンボジア探求への読書案内になる。そして今年は、カンボジア和平協定十五周年。JVC も参加する「カンボジア市民フォーラム」主催シンポジウム（本誌十五ページを参照）では、特に社会面での変化、そして変わっていないこと（逆に悪くなっていること）の様々な「根っこ」をあらためて確認する。（カンボジア事業担当 鈴木まり）



タイ

■スマトラ島沖津波

被災地支援

被災したタイ南部6県を対象に復興支援活動を実施。特に、被災した在タイビルマ労働者は労働条件が厳しく、収入も不安定なため、彼らの子どもの健康被害は顕著である。ビルマ人支援団体と協力し、在タイビルマ労働者の子どものラーニングセンターにて、健康診断と必要な薬の処方、歌や詩などを交えての公衆衛生や下痢についての授業を行なった。8歳以上の子どもたちには、これまでの授業の内容を復習するための簡単なテストを実施した。また、ラーニングセンターの教師に対し、子どもへの健康教育についてのトレーニングを実施した。(堤)

■交流・ネットワーク

これまでのタイ事業がもっていたネットワークを活かしながら「地場の市場」のその後の動向を追うことを目的に、タイの農民が日本の農の取組みを学ぶ際のコーディネートをしている。5月に来日した元ノンジョク自然農園研修生は、福島県の自然農業家を訪問したり埼玉県小川町の霜里農場で約20日間の有機農業の研修を受け、7月9日にタイに帰国した。(下田)



■下痢や公衆衛生についての復習テストを受ける子どもたち。



カンボジア

■持続的農業と農村開発 (SARD)

安全な水や食糧の確保をめざして94年から活動。今年は国全体で見るとよく雨が降っているが、活動地のオンスノール郡では7月に入っても雨が少なく、田植えの準備もあまり進んでいない。(山崎)

■資料・情報センター (TRC)

持続的農業、農村開発の資料を95年から提供。農村部への資料センターの展開の参考とするため、フランスのNGO「SIPAR」が支援しているコミュニティ図書館を視察。(山崎)

■技術学校

自動車修理の職業訓練校・寮と付設整備工場の運営強化。ブノンペン校移転先の設計図の確認や埋め立ての高さなどについて交渉を継続。(米倉)

■調査研究・政策提言、ネットワーク

東京で国連人間安全保障基金の評価ワークショップに参加。CDRI-IDS会議でカンボジアの開発調査について討議。CEDACのハッピーマウンテンバード総会でモニター結果報告。(米倉)



■フランスNGOが支援するコミュニティ図書館を視察。



ラオス

■森林保全

5月中旬から開始したナコックナイ村での土地森林委譲(村の共有林を正式に村のものとして登記する)がようやく終わった。隣のナトゥン



■ついに雨到来。皆でSRI試験栽培のための田植え。

村と山のエリアの境界線を巡る問題を抱えていたが、郡行政の仲介で話し合いを行ない、お互いに合意することができた。さらに同様に境界線問題を抱えるソッペン村とバックパナン村の2村から土地森林委譲実施の依頼がある。雨季が終わり次第、詳細な調査を行なう。6月から始めたラタン(藤)の植栽で支援した5村の苗木は順調に生育している。(賀川)

■複合農業・生活改善

米不足に対しての技術改善として、10村12家族で雨季作のSRI(幼苗一本植え; 若い苗を一本づつ植える稲作技術)の試験栽培を始めている。6月中旬まで雨量が少なく田植えが遅れていたが、現在は順調に雨が降り、田植えが進んでいる。7、8月くらいからコメの収穫の9、10月までコメが不足する。昨年支援したコメ銀行では、ノンコーク村とガーンヤンカム村の2村でコメの貸出しを終了し、村人から好評を得ている。(賀川)



ベトナム

■農村開発(ホアビン省)

2005年からディックザオ村で取り組んでいるアヒル水稲同時作(合鴨農法)は鳥インフルエンザのため縮小し、今季は魚で実践した。イ



■陸稲の種まきが終わり、土をかける。(ソンラ)

ネの収穫を終え、村人と評価会合。アヒル水稲同時作と魚・稲作同時作を比較すると、魚の方が労働や餌の負担が軽くなること、水田にカニやエビ、魚などが増えたことが分かった。土壌の改善面ではアヒルの方が効果的との意見が出た。JVCが離れた後も地域で多くの世帯が実践できるよう「アヒル/魚・稲作同時作基金」が設立された。(伊能)

■自然資源管理(ソンラ省)

住民が自然資源を活かしながら生活改善を目指す取り組みを支援。モデル世帯が中心になって進めてきた接ぎ木による苗木の準備は、徐々に成功率が上がってきた。周辺住民への苗木配布の準備のために、モデル世帯が他の住民へ苗木の植え方などを事前に指導している。また昨年に引き続き、陸稲モデル栽培も開始した。施肥やうねに沿った植え方の効果を、住民と一緒に記録をつけながら見ている。(栗原)



アフガニスタン

■女性と子どもの健康改善支援(ナンガルハル県)

◎診療所支援：診療所の拡張工事が完成し、7月5日に開所式を行なった。工事により分娩室を備えた母子保健部門が充実。器材と家具設置も終了した。地域保健員養成の初期研修が終了。28名全員が本格的な実践活動に入った。

◎女性医療従事者養成コース：研修センターの天井式扇風機と冷水器、すべての窓の金網の設置を終えた。

◎伝統産婆の職能向上研修：4集合村でモニタリングを継続。再研修の手法刷新のため、女性スタッフ4名で検討チームを作った。伝統産婆トレーナーをJICA/保健省の指導法研修に送った。

◎安全な水の供給と衛生教育：ゴレーク地域では、掘り抜井戸22本完成、機械掘井戸は9本が掘削を終え、衛生教育では45利用者グループに対して第一目の訪問を終えた。(谷山博史)

■シギ高等女学校支援

現職教師対象の研修内容と方法を調査中。(谷山由子)

■政策提言・ネットワーク

アフガン東京国際会議に向け日本政府への提言書をNGO有志で提出した。(谷山博史)



■診療所の拡張工事が完成。分娩室など母子保健部門が充実した。



南アフリカ

■環境保全型農業(東ケープ州)

安定した食料生産と農村地域の復興を目指し、環境保全型農業の研修と普及を実施。共同牧草地の土壌流出が深刻なため、牧草地の推移を考えるワークショップを2ヶ村で実施。畑のモニタリングでは、乾季に関わらず高い得点を獲得した農民が多く、新たに13名が優良賞を受賞した。また、3月に実施した研修のフォローアップを行ない、修了証を授与した。7月には、過去5年間の活動の評価を実施した。(小林)

■HIV/エイズ(リンボボ州)

南ア北部で、感染予防、HIV陽性者の支援、訪問介護、エイズ遺児支援を実施している。5月末に予防啓発活動ボランティア対象のマイクロ・ティーチング手法トレーニングを実施。6月には、HIV陽性者やエイズ遺児などを対象にした家庭菜園トレーニングを実施した。今後半年間に渡って継続したトレーニングを行っていく。また、エイズで親を亡くした子どもを対象としたキャンプを実施し、32名が参加した。7月はHIV陽性者サポートグループ月例会を実施(20名参加)した。(青木)



■親を亡くした子ども対象キャンプで、家族の絵を描く女の子。



パキスタン／インド

■大地震被災地支援

地震後9ヵ月が経過し、被災地バタグラムでは余震が減って、地震直後の大量ばらまき援助の波も去り、人々の生活も落ち着きを居り戻しつつある。家屋再建補償金の支給が開始され、倒壊した家屋の再建がそこかしこで始まっている。被災者の関心も今までの支援物資獲得競争から、生活再建に向かっている。

トイレをめぐるっては、地震後半年以上野外排泄を繰り返した結果、家の周りが人糞だらけになっているところもあり、また人口増加で野外排泄を行なう場所が見出しづらくなっているという時代の要請もあり、住民のニーズが高まっている。ばらまき型援助を避けて住民参加型トイレ事業に集中してきたJVCの出番である。地震後、7月中旬までに家庭用トイレ433基、学校トイレ29基を完成させ、トイレ使用の定着(今までトイレを使っていなかった人々のため)とトイレの衛生的な使用を促進するため衛生促進小集会を実施、のべ4,741名が参加した。(藤井)



■JVCの支援で鋼板製トイレを設置。「丈夫なトイレをありがとう」



インドネシア

■ジャワ島中部地震被災地支援

5月27日にジャワ島中部で起きた地震で、被災した人々に対して緊急支援を行った。今回は、インドネシアで環境保全のための適正技術を支援しているNGOのAPEXと協力し、インドネシア現地のNGOであるディアン・デサ財団を側面から支える形で支援を実施した。

6月13日から15日までJVCスタッフの下田が現地を訪問し、被害の状況とこれまでの支援の進捗を確認した。被災した住民は簡素なテントの中で複数の家族が一緒になって寝泊りしており、住民の中にはプライバシーが守られない窮屈さを訴える人もいた。被災してから18日が経過していたが、ほとんどの家屋が破壊されトイレも使えない状況になり、さらに井戸も地殻変動によって枯れてしまった箇所も多かった。今後、初期段階の復興支援において、JVCは引き続きAPEXとの協力の下、ディアン・デサ財団を通じて仮設トイレの設置や飲料水の供給を支援していく。(下田)



■支援物資の米を運ぶディアン・デサ財団のスタッフ。

イラク

■ガン・白血病医療支援

◎病院への医薬品提供：5月の正式政権が発足後も治安状況が悪化する中、医薬品支援を継続し、6月4日にJIM-NETとの協力でバグダッド向けの医薬品をアンマンより発送。（約80万円分）

◎政策提言：医薬品は、本来はNGOの支援に頼らずイラク保健省が供給体制を整えるべき。当局が改善策を取るように、支援先の病院との調査結果を元に訴える政策提言活動を開始。JICAやJBICなど、ドナーとしてイラク政府に影響力を持つ日本政府の関係機関の本部を訪問し、情報交換を開始した。（原）

■国際会合

5月末にヨルダンでイラク支援NGOネットワーク主催で開かれた国際会合「イラクで非暴力を広め平和を主導するためのネットワーキング会合」に参加。イラク国内NGOや政治家、地元有力者など、会合に参加したイラク市民社会の主要メンバーは、意見の違いを認識しつつ非暴力による問題解決に向けて対話を続ける重要性を確認した。帰国後、JVC水曜講座やNHKラジオ出演などで、この会議の様態を日本に伝えた。（原）



■6月4日にヨルダンからイラクへ医薬品を送り出した。

パレスチナ

■ガザ緊急支援

栄養失調児への栄養食の提供と栄養指導を5月から開始。6月末からのイスラエル軍のガザ地区侵攻・攻撃に伴い、地区内の人道状況が更に悪化。支援は11月まで延長。（藤屋）



■状況の悪化に伴い栄養失調児が増えた。栄養食を緊急に提供。

■幼稚園児栄養改善支援

ガザ地区の幼稚園児に鉄分強化牛乳と高栄養ビスケットを提供。5月から夏休みで9月より再開予定。（藤屋）

■トラウマ（心的外傷）を持つ子どもたち治療支援

言語・音楽療法を支援する活動。6月から学校は夏休みで8月下旬から再開予定。（藤屋）

■子どもの文化・教育支援

ベツレヘムの難民キャンプのハンダラ文化センターを支援。7月15日からのサマープログラムに約100名の小中学生が参加、20名の若者ボランティアが中心になって運営。（藤屋）

■巡回診療支援

7月から現地医療系NGOと共同で、エルサレム地区の「分離壁」の建設が進む地域で巡回診療・保健指導を開始。（藤屋）

コリア

■「南北コリアと日本のともだち展」

6年目を迎えた「南北コリアと日本のともだち展」を、6月29日から7月5日まで、東京都児童会館にて開催した。今年は、日本・韓国・北朝鮮に住む子どもたちが色紙に描いたメッセージと等身大の自画像を会場いっぱいに表示した。

ソウルやピョンヤンからは、写真や自己紹介文だけでなく「日本のともだちへ」と書かれたメッセージがいくつも寄せられた。一方で、日本の子どもたちは、ハングルを用いて自分の名前やあいさつを書くなど、伝える相手をより意識した作品が多く集まった。また、等身大の自画像60点は、実際に会場に来られない子どもたちを身近に感じられる作品として、好評を得た。

7月2日には、韓国の協力団体「南北オリニオックドム」の子どもたちが参加して、日本に住む子ども50名とのワークショップを行ない、最後にピョンヤンの小学校に届ける手紙を添えた傘のオブジェを制作した。これまで「ともだち展」に参加してきた中学生がグループリーダーとして運営に協力し、平和交流の一層の深まりを感じることができた。（寺西）



■傘に思い思いのメッセージを結んで完成！

スーダン

■難民帰還支援（スーダン南部）

長い内戦の間にほとんど機能停止状態に陥った、「スーダン教会評議会」が運営する車両整備工場において、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の車両を整備していくための準備を車両整備専門家の浜口と井谷が中心となって進めた。工場で17カ所ある作業ブースのほとんどが修理が不能となった車両によって占められていたが、それらを移動し、ブースを清掃して6台分の作業空間を確保した。またジャッキ、コンプレッサー、エアガン、ミッションオイル給油機などを修理及び整備点検することで使用可能な状態にした。（岩間）

■井戸づくり支援（ダルフル）

スーダン政府と主要反政府勢力の一部が和平条約を締結したことで、状況の改善が期待されているが、雨季に入ることもあり井戸掘り活動は当面実施できない可能性がある。別の活動への変更や、活動の中止も含め今後の対応を協力団体「イスラミック・リリーフ」と協議していく。（岩間）



■エンジンの修理に取り組む井谷。（中央）

会員になるまでの

長い(?)道のり

〈埼玉県〉小味 かおる

忘れもしないJVCとの出会いは、一九八八年の暮れ、カンボジア・プノンペンでのモノロムホテル。社会主義国で日本とはまだ国交がなく、ツアーも限られている中、アンコールワットしか知らずに参加した私は、虐殺博物館や孤児院訪問で「こんなでもない国に来てしまった!」という混乱、一方でくっつくの、ない笑みをうかべる人々に接し、疑問でいっぱい。

当時、在住外国人はホテル暮らしで、日本人もいると聞いてノックしたのがJVC事務所でした。あいにくクリスマス休暇で御不在。数カ月後、「プノンペン赴任の熊岡帰国報告会」と新



■カンボジアの子どもたちと。

間に小さく顔写真入りの記事が載り、「この人だったのか」とすぐ事務所に電話したのですが、「どういつく関係ですか?」と尋ねられ、萎縮してそのまま電話を切ってしまいました。あっけなくJVCとは御縁がなくなっただけです。

その後、九二年より私は別団体にカンボジアで働くことになり、カンボジア復興に取り組む「先輩」として、JVCを高め、遠めに眺めていました。歴代の素晴らしい職員のみなさんに仲良くしていただき、さらに親しい人が続々とJVCに加わり、なんとなく敷居が高いと思って

いたJVCがいつしか身近な存在になっていきました。私自身がカンボジアの現場を離れた今、会員という形で参加したくなっただけです。

これまでは「日本人のAさんが汗を流しているから支援する」というのに反対でしたが、今は素敵だなと思う人がたくさん関わっているから、JVCを支援したいと感じています。さらに総会では熱い思いを寄せる大勢の会員の方にもお会いしました。私が大好きな人や熱心な会員を集めるJVCの吸引力はなにか、会員として参加する中で見つめていきたいと思います。

新インターン紹介

土屋 真理子 会員担当インターン



国際社会の問題や他国で起きている問題に関心を持ち、大学で学ばず、自分のできることを考えていました。まず身近にあったのが国際協力NGOの存在です。そして次第にNGOで働きたいという夢を抱き始めたのですが、私は社会経験もなく何の能力も備えていないので、インターンとして事務所という現場に立つてみたいと志願しました。今こうしてJVCで活動できることに感謝しています。東京事務所にて感じるのは、各国のプロジェクトや支援のあり方などが話し合われ、色々な決断がなされる濃縮された刺激的な場所だということです。

私は、皆さんに会費に関するお知らせを送っています。これから活動を支えて下さる会員さんが増える為に、できることを考えていきたいです。皆さん! 何かいいアイデアはありませんか?!

国内ひろば

JVC network

第3回 NGO まつり in 上野

9月10日(日)@丸幸ビル

広報インターン 青木 寛子

今年も
やりまっせ~

JVCが入居する上野の「丸幸ビル」は、十五以上のNGOが密集している小さな雑居ビルです。このビルに集う各団体が丸一日事務所を開放して、様々な楽しい企画を行なう「NGOまつり」が今年も九月十日(日)に開かれます。

三年目を迎えるこのイベントでは主に、各団体が個別に行なうワークショップや上映会、カフェなどのほか、複数の団体が共同で行なうフリートークや座談会などが予定されています。メインとなる座談会のテーマは「NGOは日本でどんな役に立っているか」です。ちょっと変わったテーマですが、どんな意見交流になるかはお楽しみ。

JVCではタイ、ラオス二つのボランティアチームによるワークショップや、JVC全体の企画などを行ないます。また、共同企画のフリートークにも、スタッフやインターンが登壇します。

たった一日で、何団体ものNGOと交流できる「NGOまつり」。ご家族やお友達を誘って、ぜひ足を運んでみてください。

詳しくは、公式ブログをご覧ください!

<http://ngomatsuri2006.blog72.fc2.com/>

募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金に支えられています。

① JVC 募金

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

5月計 2,573,421 円

6月計 6,654,230 円

	5月	6月
無指定	381,827円	524,958円
タイ	0円	0円
(津波被害)	0円	1,000円
カンボジア	0円	0円
ラオス	66,000円	39,500円
ベトナム	11,000円	1,000円
南アフリカ	2,500円	1,000円
パレスチナ	1,003,870円	738,450円
アフガニスタン	23,000円	51,300円
コリア	0円	7,000円
イラク	1,066,582円	89,022円
スーダン	1,500円	0円
パキスタン地震	15,142円	10,000円
ジャワ島中部地震	2,000円	5,191,000円

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497

加入者名：犬養道子「みどり一本」

5月計 335,000 円 / 25 件

6月計 191,000 円 / 28 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座からの自動引き落としを利用する手軽な募金方法です。

5月計 1,059,700 円 / 969 件

6月計 1,078,200 円 / 976 件

編集後記

普段使っている言葉や単語、「環境にやさしい農業」「持続的な開発」ましてや「エコ」「LOHAS」…、それらが悪いわけではないが、JVCの活動の意義を「これだ!」と端的に言い表わせるものはなかなかない。そこに見えているものに手を伸ばしているのにつかめない、そんな感じだ。文才のない身としては、仕事や現地での活動を通して日々感じ、生み出していかなければならないのだろう。(H)

カンボジア市民フォーラム主催 国際シンポジウム

『検証 カンボジア和平協定から15年を振り返る』

～ 貧富の格差の縮小と民主的な社会の実現に向けて ～

カンボジア市民フォーラム事務局調整員 山田 裕史
(元 JVC カンボジア事業インターン)



■大盛況だったスタートアップ・プログラム①(7/21実施)

カンボジアは今年10月23日、「パリ和平協定」の締結から15周年を迎えます。カンボジア紛争4派と関係18カ国(日本を含む)によって締結された同協定は当時、20年以上におよぶ内戦と虐殺、混乱の時代に終止符を打ち、平和と復興・開発の時代の端緒を開くものとして、カンボジアの人々のみならず国際社会からも広く歓迎・評価されました。

それから15年。カンボジアでは政治的安定が実現し、経済的復興や市民社会の活性化など、肯定的な変化が見られるようになりました。しかし他方では、国際社会による大型援助の実施にもかかわらず、この平和と復興・開発の時代に、ポル・ポト政権崩壊後の1980年代にも見られなかった極端な貧困や貧富の格差が生まれるという、逆説的な現象が生じています。こうした状況は、一義的にはカンボジア政府の政策や実際の行政(パフォーマンス)の責任ですが、カンボジアの国家財政の約半分が国際社会の援助によってまかなわれていることを考えれば、国際社会の援助の妥当性も問われるべきではないでしょうか。また、パリ和平協定はカンボジアにおける民主化の起点となりましたが、フン・セン首相の人民党の軍事的・政治的優位が確立した1997～98年以降、民主化は後退し、権威主義的な統治が強化されています。

今年がパリ和平協定締結から15周年という節目の年に当たることから、カンボジア市民フォーラムは10月22日(日)、パリ和平協定の精神と日本政府が援助の基礎におく「人間の安全保障」の観点から、過去15年間のカンボジアの変化を国際援助の評価を含めて検証する国際シンポジウムを開催します。また、同シンポジウムへ向けたスタートアップ・プログラムとして、7月から3ヵ月連続で講演会や学習会を開催しています。詳細は、本誌同封の案内やホームページをご覧ください。

カンボジア市民フォーラムとは…

カンボジアの開発や人権に関わるNGO、法律家、研究者、個人などからなるネットワーク型団体です。カンボジアの人々が直面している問題に対して、現地NGOと協力しながら提言活動や選挙監視活動を行なっています。1993年9月に設立され、JVC代表の熊岡路矢が事務局長を務めています。

ホームページ：<http://www.pefocj.org/>

ホームページ：会員専用ページパスワード(9～10月)：bH79wX8SaB

JVC +
管洋志
ジョイント
企画



Photographs by Hiroshi Suga

ジャワ島中部地震支援 チャリティ写真展

『アジア育ち』

以前から JVC カレンダーへの写真提供などでご協力いただいている管洋志さん。先のジャワ島中部地震で被災された皆さんに「なにか役に立てないか」との想いから、JVC と共催で写真展を開催することになりました。会場では写真パネルを特別チャリティ価格で販売いたします。売上げは、JVC を通して衛生面での生活改善支援に使われます。

会 期：2006年9月17日(日)～9月23日(土・祝)
開館時間：11:00～19:00 (最終日は 17:00 まで)

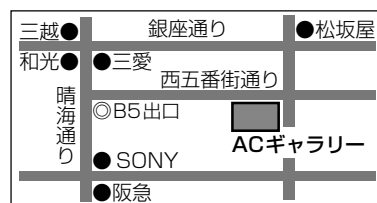
会 場：銀座 AC ギャラリー

〒104-0061 東京都中央区銀座 5-5-9 阿部ビル 4F

Tel. 03-3573-3676

入場料：無料

お問い合わせ：JVC 荻野 Tel. 03-3834-2388



地下鉄銀座駅 B5 出口 徒歩 1 分



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVC の活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志で JVC に参加し、活動を継続してきました。JVC はボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■JVC では会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVC の方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年6回の会報誌と年次報告書をお届けします。

◎一般会員 10,000 円

◎学生会員 5,000 円

◎団体会員 30,000 円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。

→ s-tera@ngo-jvc.net

会員数 (7月31日現在) 合計 1,503 人
(正会員 696 人 賛助会員 807 人)

■オリエンテーション(説明会)へお越しください。

JVC の活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。(無料。予約不要です)

第1月曜日 午後7:00 - 8:30

第2・第4土曜日 午後2:00 - 3:30

※会場は JVC 東京事務所です。

■E-mail

info@ngo-jvc.net

■ホームページ

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は再生紙を使用しています。